

保育施設設計にみる子ども用デザインの考え方 — 北欧を中心に世界の国を比較してみると —



北浦 かほる
NPO法人子どもと住文化研究センター理事長
(大阪市立大学名誉教授)

1. 古い建築施設の再生利用

夜間保育所の保育環境整備を目指して、北海道から沖縄まで 21 の認可夜間保育所を院生・学生と全国行脚し、深夜の保育実態を観察・調査したことがあります。その後続いて夜間保育を中心にデンマーク 13 園、イタリア 5 園、韓国 12 園、アメリカ 14 園と世界の 44 の保育所を調べて来ました。

夜間保育時間は多様で、24 時間保育や延長を含めると 19 時間以上と、在園時間の長い子どもも少なくありません。ほとんどの子が保育園で夕食をとり、3 食の内 2 食以上を保育園で食べています。午睡だけでなく夜の睡眠も保育園でする子どもが多くみられます。

夜間児の生活リズムを乱す最大の原因は降園時刻が深夜に及び、睡眠時間を分断する事です。学齢期になると一般社会の生活時間帯に合わせる必要が生じるため、問題はさらに大きくなります。

欧米では特に夜、子どもは家庭で育てられるべきであるといった伝統的な考え方が強く、夜間はほとんどがベビーシッターなどで対応しています。アメリカでは夜間保育所は少なく、24 時間空港などの限定された所にしか見られません。レキシントンの企業内夜間保育所では 3 交替制の親に合わせ、昼間と同じ保育プログラムを夜間に実施していました。

韓国では夜間保育所はソウル市だけでも 60 余もあります。貧富の差が大きく、24 時間保育所ではトラックなど遠距離運搬業の父親が迎えに来ず、1ヶ月以上預ければなしになっている子ども居ると言うことでした。

1993 年に夜間保育所が開設されたデンマークの特徴は夜間の子どもの生活時間が不規則にならないように守っていたことです。一定の時刻までに帰らない子はすべて宿泊させていました。名案！と思えば後日ですが、日本の関係者に告げたとこ「金がかかる」の一言が返って来ました。

世界的に見ると、幼児施策には生活重視と就学前教育重視の 2 つの流れがあります。デンマークや日本の保育施設の様には福祉面から子どもの生活を重視している所と、アメリカやイタリア・韓国のように就学前教育を重視し英才教育に力を入れている国があります。こうした意図的な政策の外にも、国によって建築としての風土性や施設自体の位置づけが違っていること、建築物の再生利用のダイナミックな考え方、建築内外空間の連続性に対する考え方などをはじめとして、細部のデザインに及ぶ保育空間の構成や子どもの行為の捉え方の違い等々が見られました。

特に興味深かったのは、子どものためのデザインに文化による考え方の違いが色濃く反映されていたことでした。

子どもが 19 時間前後を過ごす保育空間は子どもの 1 日の生活の場そのものといえます。「家」以上に家の機能が求め



図1 夜間保育園・デンマーク保存地区の 460 年前の建物



図2 デンマーク・広い庭のある古い農家



図3 夜間保育園入口



図4 雨の日も森へ

られているはずですが。以下ではそうした視点で各国の保育空間のあり方や設え方などを見ていきます。

デンマークでは都心のビルや農家、地主の家などを保育園に再生している所がよくあります。利便性を重視して都心に拠点を置き、「移動型」にすることで保育所としての立地条件を充たしていました。都心の保存地区にある 460 年前の古いビルの 1 階を夜間保育園(図 1)に改装し、朝夕の子どもの居場所にしていました。子ども達はバスで 30 分かけて広い庭のある古い農家(図 2・1920 年建設)に行き、10~16 時頃



図5・6 460年前のビル内夜間保育園インテリア(デンマーク)



図7 デンマーク・地主の家を改装した保育園



図8 改装した地主の家の外観と庭



図9 イタリア・集合住宅メディカルセンターを改装



図10イタリア半公立保育園



図11 サンフランシスコ・パルケア平面図
(木造・鉄骨造、中庭の床はもぐらが出ないと好評)



図12パルケア中庭のRC床

までそこで過ごして都心に戻ります。デンマークにはこのタイプの「移動型」保育園が多くみられます。

その究極が建物のない「森の保育園」です。晴雨にかかわらず弁当持参で目的の森に入り、本を読んだり歌や遊戯で過ごします。毎日4~7km歩くため歩き方が違うと評価が高く、9時には集合場所に集まり2時に迎えに行きます。園長を含めスタッフ2人にボランティアがつきます(図4)。1952年にプラタオが自分の子を育てた方法で、おむつのとれる2歳頃から参加でき4つの森で275市中250市にまで広がっています。

少数単位で家庭的保育が重視され、地主の家を保育園に改装した所もあります(図7・8)。家具や照明器具なども家庭にふさわしいデザインが選ばれています。デンマークでは夜間部分の広さは4㎡/人ですが基準はありません。昼間保育所のクラス面積基準は日本と同程度ですが、建物全体として6㎡/人が認められており、寝室や居間・サンタリー等の夜間室面積を加えると日本の4倍以上になります。

イタリアでも再生利用が多く、集合住宅の1階や工場・倉庫などがよく使われていました。集合住宅の1階にあった25年

前のメディカルセンターを改装した例(図9)や、オフィスビルの1階に設けられている保育所もありました(図10)。

アメリカでも倉庫や民家などが保育所として再生利用されています。サンフランシスコ国際空港関係者やその近隣の人々のために設立されたパルケアは1971年に家具屋からバス事務所ビルに改築され、1997年に保育園にリノベーションされたものです(図11・12)。

今回始めた連載は、子どものためのデザインのあり方を考えるために、現役時代にやってきた夜間保育所の調査や研究を振り返ってみたものです。夜間保育所の最新情報になっていない面もあるかと思いますが、お許し下さい。

■北浦かほる

大阪市大卒。倉敷建築研究所(現・浦辺設計)を経て大阪市大名誉教授。帝塚山大学教授。学術博士。NPO法人子どもと住文化研究センター理事長。居住空間デザイン学及び環境心理学。主著書に、「世界の子ども部屋」「住まいの絵本に見る子ども部屋」「インテリアの発想」「インテリアの地震対策」

